
海の底で

yoshina

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

海の底で

【Nコード】

N2855J

【作者名】

yoshina

【あらすじ】

つらつら書いてた高木メインのsssがたまりましたので、まとめて投下計画。高木出ずっぱりの短編集。全体通りしてシリーズ調、でも時々ほのぼの。全八話。

一、足の部屋（前書き）

多少生々しい描写があります。ご注意ください。

一、足の部屋

某風邪に移り強制休日になった目暮警部は、ある意味ついている。目線を上にやり、白鳥は内心そう思った。

陣頭指揮を代わりに取るのはいいが、早速こんな事件が起こるのはいかなものだろうか。

今朝登庁前、黒い猫を見かけたのを思い出して、今日はついでない日だと結論付けた。

古びた木造アパートの二階の狭い一室で、あわただしく監識や刑事が動き回る中、白鳥は真ん中で「それ」を見上げる。

「どうやったらこんなに上手く吊れるんでしょうね」

隣で、後輩の刑事がため息とともに同じく「それ」を見つめる。

白鳥は、そのため息が嘆きと言うより呆れからくるもののように感じた。

「縄が滑りにくい素材で出来てるんじゃないか」

ぱっと見、麻の紐でくくりつけられているように見える。

人の、右足首が。

骨の出っ張り具合からして男の足だろう。

それが天井の中心にぶらりと吊り下げられていた。

不謹慎かもしれないが、妖怪のから傘小僧の足を白鳥は思い出した。

あんな感じの奇妙さと不気味さがこの片足からかもし出されている。

彼の適当な答えに納得しなかったのか、高木は天井の中心に歩み寄った。

まだ監識の途中なので、ロープを外すことはできない。

白鳥よりかは若干低いとはいえ、彼も長身の部類に入る。

質素なアパートの天井くらいなら観察するのは簡単なので、目を凝らした。

「これ、ロープに小さな釘が入ってるんじゃないですかね。その釘で足を刺して絡め取ってるんですよ」

そう言っって高木が指をさした。

白鳥がその方向に視線を移すと、なるほど、確かに足首に細い何かが数か所刺さっている。

しかしロープの外側からその釘を見ることはできない。

ロープの中に組み込まれたものようだ。

「……こういうのは、どこのSMショップにでも売っているのかな」

「さあー。でもこれは手製ではなく既製品ですよねえ。マイナーな商品ですから、これ売ってるお店探して販売記録見つけたら、結構すぐ犯人捕まるかもしれないよ」

「だといいけどね」

口では冷めた返事をするが、早速白鳥は近くにいた所轄の刑事たちに、近辺のアダルトグッズを販売するお店をリストアップするよう頼む。

監識の作業も進んでいるので、もうすぐロープをほどくこともできるだろう。

「ところで、この足の持ち主は、やはりこの部屋の住人かい？」

「だと思います。一週間前からここに住む二十代の男性が音信不通になってますね。不審に思った友人がやってきて、鍵が開いてたの

で思い切って扉を開けたところ、このありさまだったと」

その友人もたまったもんじゃなかっただろうに。

心の中で同情しつつ、白鳥は高木のメモ帳を見せてもらう。

先ほど、第一発見者の友人やこのマンシヨンの管理人に聞き取りをした詳細が載っている。

『行方不明男性に外反母趾の傾向あり（友人談）』と書かれてあるので、天井の足を再度見る。

「傾向どころか、見事な曲がり具合だね」

「ええ」

真顔で高木が頷き返して、メモを受け取った。

「この状況、どう考えますか。普通に足を切るだけなら吊るす必要は無いですよね」

「愉快犯か、もしくは宗教的な儀式か……。どちらにしる、この奇妙な光景は犯人の心理状態を映しているように、僕は思えるね」

「心理状態、ですか」

「ああ。君も言った通り、こんなことやる必要は無い。なのにやった。つまりそれは単に犯人の欲望に過ぎなかったからだよ。吊るすことが、何かの象徴になっているのかもしれない」

これまでの経験を踏まえて、白鳥は見解を述べる。

普通ではない殺し方をする人間と言うのは、その殺し方の中に自分の持論を込めているものだ、彼は考えていた。

対する高木は、その見解に少し考える素振りを見せた後、頭をかいた。

「不服かい？」

「いや、そんなことないですよ。なるほどなって思うんですけど、ただ、なんかこう、儀式とか心理の象徴とか、そういう論理で進めるのが僕いまいち感覚つかめなくて」

高木が苦笑して理由を言う。

一方白鳥は面白そうに右眉を上げた。

「ああ、君は意外と白か黒かで分けたがるほうだからね」

「うーん、どっちかって言えばそうですね。ポエムっていうんですかね？ ああいうの言い出しそうな感じの犯人がどうもよくわからなくて苦手です」

単純ですみません、と言う彼に、白鳥が褒めてるのかけなしてるのかわからない歓迎をする。

「単純でいいじゃないか。僕の見方は精神論から入った。じゃあ君のような単純な人間が考えると、この事件はどう見える？」

この試すような問いに、彼は「ええ？」と戸惑った。

ためらうように、床と天井に視線を何度か動かす。

だがすぐに神妙な顔に戻り、手帳を開いた。

さつきから自分なりの考えは持っていたのだろう。

あまり間を置かず再び手帳を閉じた。

「……えーと、まずなんで足を吊ったかについては、精神論に入りそうなので白鳥さんにお任せします」

「ほう、それで？」

「僕が考えているのは、足の切断方法に関してです」

「なるほど」

「検視官から、足を凍らせてから切つてであると聞いています。大き

な冷凍庫もしくはドライアイスを敷き詰めた大きな箱に遺体を数日入れてから切ったんじゃないかと言うのが検視官の見解です。凍らせたのは、遺体を切るときに血を飛び散らないようにするため。

というのが、普通に考えたら出てくる理由です」

「まあ、理にかなってるね。つまり最初から切断するつもりだったってことだね」

「はい。でも、もうひとつあると思っんです」

彼の目がいつになく厳しいものになったことに、白鳥は気付く。

「もうひとつ?」

彼が頷く。

「自分自身で、切った場合です」

不意に耳に入った案に、近くにいた署員がぎょつとして高木を見た。

白鳥も少しだけ目を丸くしたが、黙って彼の推理の続きを促した。

「自分で切るために、感覚を麻痺させるよう足を凍らせたとも考えられます。僕たちの立つ真下の絨毯に、血では無い透明なシミがかなり広範囲にできてます。もし、これがこの足の持ち主の汗だったとしたら」

聞いていた署員が、あわてて自分の足元を見た。

そして真上に吊ってある足首と見比べる。

彼の言う通り、足首のまっすぐ下にシミがある。

「……足首を失った男が、不自由な状態で必死になって天井に自分

の足を吊った、か」

「あくまで想像です。すいません。少し、過ぎたかもしれません」

謝りはするが、まっすぐと視線を合わせる高木に、白鳥はこの男がそれなりに自信を持って推理をしたのだと見てとれた。

芝居がかつたゆっくりとした動作で、両手を何度か打ち鳴らす。

「面白い推理だよ。確かに足首を切ったからと言って、死んでいるとは限らない。エスカレーターした自傷行為だと考えてもおかしくはないね」

しかしその場合、切った男はどこに行ったのだろうか。

ふらつかせる足元のまま、一体どこに。

二人の考えは同じところに行きつくが、高木のほうが先に降参する。

「でもまあ、そこまで考えても結局どうして男が足を切ったのかはわからないんですけどね」

「そういう時は、その人物になったつもりで考えてみたらいいんだよ」

アドバイスするも、彼は困ったように笑う。

「僕なら、足なんて切るくらいなら舌を先に切りますよ」

「だから、”つもり”だよ。というか、足も舌もどっちもどっちだろうに」

彼と同じものは見ているが、感覚が正反対なので、どうも平行線をたどっていくらしい。

そのちぐはぐさにおかしみを感じ、白鳥は思わず笑った。

一、足の部屋（後書き）

のっけから趣味全開ですんません。新しくなった投稿システムの練習も兼ねて、ちよつと投稿させていただきます。

二、プロセス（前書き）

今更過ぎますが、OVAの「16人の容疑者!？」の小話。

二、プロセス

ささやかな悶着もあつた白鳥家の別荘で、高木と平次は相部屋になつた。

一見不思議な組み合わせだが、それもそのはず。

余つた者同士だからだ。

とはいえ、お互い人見知りはいし、一定の基準以上の社交性は持ち合わせているので、ほとんど支障は無かつたが。

夕飯も終わり、その後の談笑も済み、用意された部屋に行くと二人は荷物の整理を始める。

男二人なのでそこまで量はない。

すぐに平次はベッドの縁に腰掛けて、何やら手帳を見始めた。

一方の高木も必要最低限の整理を終えると、暇そつに手帳を弄ばせている少年を視線に捉え、思いついたようにバッグの中からある物を取り出す。

「食べるかい？」

差し出されたスナック菓子に彼は首を振る。

「おおきに、でも遠慮しとくわ。それに、夜にそんな油っこいもん食べたら太るで？」

悪戯つぼくそう言われてしまえば苦笑するしかない。

高木は袋をポストンバッグに収めた。

その後姿を、いつの間にかベッドから立ち上がって近づいてきた平次がひよっこりのぞく。

彼のバッグのほかにはチョコレート菓子も入っていた。

「高木さんって結構こういうの食べるんやな。あの千葉っちゅう人ほどじゃなくても、ほんま太るで」

「あはは。でも四六時中動く仕事してると、知らず知らず何かを食べてるんだよねえ」

「あー、疲れた頭が糖分を欲してるんやわ」

「だろうね」

「刑事さんは大変やなあ」

労わる様にそう言うと、彼は息を吐いてベッドに戻る。
ごろんと大の字になって腕を伸ばした。

「でも、高木さんは似合てるわ。刑事が」
「え、そうかい？」

いつも刑事らしくないと言われることが多いので、少しだけ目を丸くする。

そしてバッグから離れて彼もベッドの縁に腰掛ける。

すると彼に視線を合わせるように平次も起き上がった。

胡坐をかき、右に首を向けにっと笑う。

「刑事っちゅうか、警察っちゅう組織に似合う」

ますますワケがわからない、といった感じで高木は首をかしげる。

「……ごめん、よくわからないんだけど」

「ええてええて。これは単なる俺の思いつきやから。ただ、もしかしたら、あんたはこの別荘にもいる他の刑事達よりも刑事にふさわしいかもなっつてことや」

「それは買いかぶりすぎだよ、服部君」

「買いかぶりすぎだよ。あんたはその困ったような笑顔

で、ここにも現場にもおるんやから」

そこで彼は虚を突かれた様に押し黙った。

自分でも気付かなかったことを言及された。そんな感じだ。

「刑事は手品師のようにポーカーフェイスを保てば良いつちゅうもんやない。いつもの自然な態度をいかなる時にも崩さんかつたらええんや。それが怒った態度でも良いし、無表情でも良い。勿論、あんたみたいなそんな態度でも」

高木は黙ったままだ。平次は気にせず言葉を続ける。

「それに警察は犯人捕まえて終わりつちゅう仕事とちゃうしな。むしろ、それ以降の取調べや証拠確認のほうが大変かもしれん。本当の意味で事件が解決するまでを考えるなら、どこまでも態度を崩さない人間は刑事として理想的や」

そうは思わんか？と彼は問いかけた。

挑戦的な目だ。早熟した才能を持って余さず、完璧にコントロールする少年は一回りも違う大人にどんな答えを望むのか。

いや、単なる気まぐれか暇つぶしかもしれない。

彼やもう一人の高校生探偵くらいにしか出来なさそうな、高度な暇つぶしだったが。

しかし、いつもなら戸惑って口ごもってしまう高木は、今回に限って案外早く答えを出した。

「確かに、一つの目的を達成させることを考えるなら理想的だと思うよ。……でも、その目的までに避けることの出来ないプロセスを考えるなら、そんな刑事はふさわしくくないと思うな」

彼は笑った。先ほど言及された、やはり困ったような笑顔を平次に見せて。

そんな答えに、少年は肩をすくめて再び横になる。

「そーいう答えは、あんまおもしろいわ」

「そりゃ公務員だしね」

つまらなさそうに手足を伸ばす少年を見て、高木は急に煙草が吸いたくなった。

三、いつか。(前書き)

64巻の麻雀牌事件の、短い後日ネタ。

三、いつか。

「お鍋でもしよっか」

「え？」

暖房の効いた病室の、白いベッドの上で高木は佐藤を見上げた。深夜から朝にかけて働いていたため、仕事終わりの彼女が訪れたのはお昼過ぎ。

例の模倣犯の確保で大怪我を負った、彼の元を訪れるのは三日目だ。

まだまだ事件の後始末は残っているが、こうやって佐藤は時間を見つけてお見舞いに来ている。

そして今日も、昨日と同じようにやって来て取り留めも無い話をしていると、突然脈絡なく先ほどの台詞を彼女が言ったのだった。未だ痛みが残る体に響かない程度に、彼は彼女のほうに首を向ける。

「どこで、ですか？」

「違うわよ、退院したら二人で鍋パーティーでもしよっかってこと。温泉の代わりにね」

くすりと笑って彼女が鞆からグルメ雑誌を取り出した。

千葉から借りたものだと言う。

あらかじめ端を折ってあるページをぺらりとめくって彼の前に提示した。

「ほら、この通販で買える鍋セット。美味しそうじゃない？」

楽に見えるよう、斜め上にかざされたページを彼は見る。

なるほど、沸騰する土鍋に魚介類やキムチがふんだんに飾られて湯気が記事一杯に立ち込めている様子は、確かに美味しそうである。

「良いですね。退院したら僕の部屋でやりましょうよ」

病院の食事に早くも飽き始めた彼が同調すると、佐藤は満足そうに頷く。

雑誌をたたみ、彼女の目が裏表紙の広告に行く。

同じく湯気の立ちこめる写真だが、それは鍋ではなく。

「そうだ、この温泉の素とか買って来てお風呂に入れようか。自宅で温泉気分とか、良いかも」

せつかくなら凝った一日に、と彼女は楽しみに提案した。

彼はその案に、今度はすぐには乗らず、ふと考えるように少しだけ天井を見上げる。

次にもう一度恋人の顔に視線を移すと、真顔でこういった。

「でも、僕んちのお風呂二人は入れませんよ？ いでっ!？」

すぐさま佐藤のデコピンが彼の額に直撃して悲鳴を上げる。

「ちよ、佐藤さん今の本気じゃないっすか!？」

「全く調子に乗るからよ!」

顔を赤らめながらの睨みはさして怖くはなかったが、それでもやはり今までの立场上、「はい……」と大人しく引いた。

まだだめかあ、と高木が呟きながら窓に顔を向けると、佐藤はため息をつく。

それこそ、温泉いけるくらいちゃんと怪我を治してからよ

内心そんな言葉を彼にかけた。

まだ、声には出さない。

いつか言っただげようとは思いますが、まあ徐々に、で良いだろう。

言葉にしない代わりに、佐藤は目の前の不貞腐れる彼の横顔にとても幸福な笑顔を向けた。

四、銀色ライブラ（前書き）

千葉＋某喫茶店の女の子のねっ造CP入ります（笑）

四、銀色ライブラ

これまた珍しいものを見れた。

千葉はものすごく他人事のように、前述の感想を心の中で述べた。見ているこちらが清々しくなりそうなほどの飛びひざ蹴りが、逃亡しようとした男に決まったのだ。

そんな見事な技を決めたのは、さっきまで自分の後ろにいたはずの先輩刑事。

一足飛びで自分を越えて、殺人犯の額にまで飛んでいた。

「なっ何しやがんウゴ!?!」

屈強で頑丈だった犯人は、何とか気絶を免れたようだ。

顔だけ上げて条件反射で叫ぼうとする。

が、トドメの拳が鼻の辺りに入って、今度こそ地に沈んだ。

(……鼻、折れたなきつと)

千葉は間抜けな面で気を失った犯人を見降ろし、ほんの少しだけ同情する。

「高木さん、ソレつけたままやっちゃったらメリケンサックつすよ」

千葉が呼んだ先輩刑事は、男の傍から立ちあがって、ぱんぱんと手をはたいた。

「あー、しまったな。うつかりしてた」

高木は思い出したように、自分の右手の中指についたゴツイシルバークセを見つめて、悪びれもせずに戻事する。

その間にも、後から来た所轄の刑事たちが気絶した男を取り囲み、現在の時刻を読み上げていた。

「ホントにうつかりっすかあ？」

「もーいいだろー。この辺りの監視今日で七日目だったんだぞ」

彼は暗に、中指の存在をわかっていて犯人にとどめを刺したことを認める。

一か月前に起こった殺人事件の犯人がわかったものの所在がわからず、よくうろついていたと言う深夜の繁華街で刑事たちが探し始めたのが二週間ほど前。

この繁華街は若者が大半を占めており且つあまり治安のよくないところだった。

ベテランの刑事たちが神妙な顔つきで張り込んでも、浮いてしまふと捜査一課は考えた。

そこで本庁と所轄の若手を中心に編成した監視組を作り、繁華街に放っていた。

二週間前から一週間前は、流行りの某女性シンガーが着そうなゴスパン調のファッションに身を包んだ佐藤が若手の指揮を執った。

同じ人物が長期に渡って張り込んで、犯人に気付かれかねないので、一週間前からは高木と千葉がそれを引き継いだ。

そしてまた明日から交代と言う日に、ついに男が現れたのだ。

どうやらまだ自分が容疑者になっているとは気付いていないようで、逃亡資金のためか貸金業のビルに悠々と入っていく。

その間に、男を目撃した所轄の若手刑事が本庁の目暮と、比較的距離の離れたところで巡回していた高木・千葉両刑事に連絡する。

しかし、高木と千葉が現場に駆けつける前に男は出てきてしまった。

思わず若手の刑事は男の前に立ちふさがり警察手帳をかざす。

その瞬間、全てを悟った男が走り出した。

大柄で腕っ節のある男に、刑事とはいえ小柄な部類の青年は止めることができず、逃げられてしまう。

その時高木と千葉が現場に間に合い、細い脇道に入ったところで男を確保したのであった。

夜な夜な延々とまばゆい繁華街をうろつく捜査は、疲れと眠気を積み重ねさせる。

仮眠を取っても、気休め程度にしかならない。

大技かましてとどめまで刺した高木の「言い訳」はそこにあった。千葉も同じ立場だったのですぐわかる。

簡単に言うなら「よくもここまで探させたな」というつつぷん晴らした。

目元のクマが見えにくいラインまで被っていた黒いニットキャップを取りながら、高木は携帯で犯人確保を本部に伝える。

褒め言葉が返ってきたらしく、頭を下げながら電源ボタンを押した。

「これで終わりましたね」

「第一段階が、だけどな。これから取り調べだ」

「この状態で出来ます？」

「……さつきよくやったって管理官に言われたところだけど、帰ったら怒られるかもな」

明らかに取調室前に病院送りな犯人の気絶した様に、高木が苦笑いで視線をそらせた。

千葉も「知りませんよー」とからかいながら、眼鏡を外す。

千葉は大学生に見えそうな服装に身を包んでいる。

まだまだいける、と意気込んで若者向けのリーズナブルなブランドの緑のカットソー（アロハ柄）にジーパンにセルフフレームの眼鏡をかけていたわけだが、本庁での評判は笑いをこらえた「いいじゃ

ないか」という一言だった。

「梓ちゃんに選んでもらったのになあ」

「ん？」

「あ、いやなんでもないです」

ぼろっと心の言葉が出たものの、すぐに打ち消す。

とある事件がきっかけで知り合った女性に、思い切って頼んだことを思い出し、千葉はため息をついた。

一方高木は意外にもちよつと近寄りがたい感じのパンク系で、優しい目元をニットキャップでごまかし、黒いＴシャツにグレーのルーズパンツを、更に水性で付けられるタトゥーまで腕に入れて、かなりの気合の入れようだった。

彼自身、大柄ではなく骨格が出張った長身のため、目元さえ隠せば自然な格好である。

佐藤のゴスパン調といい、恐らく二人でどんな服装にするか話合ったら、パンク系でちよつと冒険しようとかいうノリになったんだろう。

千葉は安易にそのシーンが想像できて、うらやましい視線を彼に送った。

そしてある点に目がとまる。

「あれ？高木さん、昨日そんな腕輪してましたっけ」

見慣れない、角ばった平たいリングが彼の左手首にかかっているのに気付く。

銀色の輪に黒い複雑な装飾の入ったものだ。

高木は、ああこれか、とリングを外して掌で遊ぶ。

「佐藤さんが張り込みの時やってたやつだよ。なんかショップで見

つけて直感でこれはいいやつだと思ったんだってさ」

飾り物に興味のない佐藤さんにしては珍しいよなー、とのんきに言う高木に千葉はツツこむ言葉を飲み込んだ。

「いいやつ」ってどんな「いい」ですか佐藤さん。

この世のものではない何かが見えるとか何とかいいうつわさがまことしやかにささやかれているのを思い出し、千葉は冷や汗をかいた。

「中々犯人捕まらないから、昨日ゲン担ぎに貸してくれたんだけど、それで今日捕まるんだから、このリングすごいよな」

リングより佐藤とそんな彼女をナチュラルに受け止めている高木がすごいと思っただが、なんかもうそれで二人がいいならいいかなと千葉も思い始めてしまう。

いや、彼女がつけていても見つからなかったわけだし、それをつけて犯人見つけたのは二人の「愛」ゆえなのかもしれない。

そんな仮説を立てながら、自分の手中にある眼鏡を見つめて、もう一度ため息を吐く。

「なんだ、せつかく捕まえたのに元気ないな」

「……いや、俺なんかお二人に比べたらまだまだ先は長いってこと
つすよ」

「？」

千葉は意中の女性のほんわかスマイルを脳裏に浮かべ、佐藤のハートゲットに至るまでの数々の難関と、あの子の超天然具合どつちのほうが大変だろうかと、天秤にかけた。

しかしどちらもふわふわと浮いて計測不可になりそうだったので、乾いた笑いで高木の怪訝な目をやりすごした。

五、好戦的なひと（前書き）

麻雀牌事件の小ネタ第二弾。この頃の白鳥は、まだ彼女のこと好きでした。

五、好戦的なひと

いくら入院しているとはいえ、刑事である以上報告はしないといけない。

高木は、犯人の供述した内容の裏づけを取るためにやってきた白鳥に、あの日犯人の自宅であった修羅場を説明していた。

あつという間の出来事であったため、思ったよりも記憶が飛んでるらしい。

高木は記憶を拾い集めていくように、たどたどしく言葉をつむいでいく。

その内容は、時間にしてみれば短いものだっただろう。

しかし、一歩間違えば大惨事が起こっていたに違いない逮捕劇だった。

白鳥は神妙にその説明に聞き入る。

ペンを握る手も、わずかに力が入った。

どこか一点を見つめ、当時の状況を思い出す高木に、時折質問を入れながら時間は過ぎ去っていく。数十分後聞き終わった白鳥は、パイプ椅子の背もたれに背中を任せて、ため息をついた。

「ケータイを折ったのか。君も結構ムチャをするな」

感心する、というよりは呆れた風な言い方だ。

「でも、逆に音信不通のほうが何かあったのだと伝えられるんじゃないかって……」

「それは勿論わかっている。僕が言いたいの、君が”そんな状態”になった原因が、君自身にも大きくあるということだ」

言い返すというより言い訳染みだ感じの彼に向かって、白鳥はボ

ールペンのノック部分でぴしつと指した。

そして、そんな状態、と言われた高木はぐつと詰まりペン先から顔をそらす。

顔面流血、全身打撲（金属バットで滅多打ち）、肋骨一本骨折（拳銃で）、全治一カ月半。

これが”そんな状態”である。

ケータイを折って、犯人を挑発するような言葉を発したための結果だと言われれば否定は出来ない。

悪戯が見つかった子供が先生に咎められている様な状況に、白鳥はもう一度ため息をついて、メモ帳を閉じた。

「僕は交渉に交渉を重ねて進めていくタイプなんだ」

「…はあ」

突然関係無さそうな話題に、高木が再び顔を戻す。

あいまいな返事しか出来ない彼に、白鳥はお構いなく続ける。

「どんな状況になっても、多分僕は話し続けるだろう。……でも君は違うだろうな」

器用にペンを指先でぐるりと回した。

「君は案外喧嘩っ早い」

「ええ？」

「いや、好戦的と言うべきかな」

思いもかけぬ言葉で、彼が目を丸くさせる。

しかし、予想外過ぎて体に若干力が入ったらしく、すぐに眉をかめた。

取り繕うように、苦笑いで聞き返す。

「僕がですか？」

白鳥がいつもの含みのある笑みを見せる。

「ああ。君は面の皮が厚そうだ」

「酷い言われようですね」

表面上からは捉えにくいが、その行間の端々に白鳥特有の揶揄がちりばめられている。

それがわかる程度に付き合いがある彼は、あまり気分を害した風ではない。

少しだけそんな彼を見下ろしてから、白鳥はがたんとパイプ椅子を後ろに退く。

「まあ、タイプは違うが、わかりにくさで言えば彼女とは似ているかもしれないけどね」

そう言って、立ち上がった。

大体の裏づけが取れたからには、長居は無用だ。

それに、言葉にはしないが、あまり怪我人を無理させたくは無。

白鳥はパイプ椅子にかけていたコートを、手に取った。

高木は引き留めはせず、視線でその動きを追う。

そして一息置いてから注釈をいれた。

「佐藤さんはわかりにくそうで、実はわかりやすい人ですよ」

白鳥の、コートを羽織ろうとしていた手が止まる。

立ちあがったことで更に見下ろす距離が長くなった、彼のほうを振り返る。

白鳥は嫌味の無い程度に口角を上げた。

「そついうところが、君は好戦的だっていうんだよ」

六、white lovers

見慣れた姿が、足早にこちらまでやってくる。
寒さに体を丸めた格好が何だか可愛く思える。

口元をゆるめながら、佐藤は手を伸ばして助手席のドアをあけて
やった。

「お疲れ様」

「どうもです。あ、これどうぞ」

「ありがとう。段々外も寒くなって来たわねえ」

車内に滑り込んだ高木は、コンビニの袋から缶コーヒーを取り出し
彼女に渡す。

路上に止めた愛車のアンフィニの中で、二人は灰色がかった空を
見つめる。

その空の下には、現在監視中のアパートが建っている。

あのアパートから出てくるであろう、ある犯人を彼女たちは待っ
ていた。

午前中からずっと見張ってるが、未だ進展は無しだった。既に夕
刻のころ。

「今夜は冷えるそうですよ」

「そりゃあ、これだけ空気が澄んでたらねえ。早く出てこないかし
ら、あの男」

「まったくです」

缶コーヒーで掌を温めながら、高木は白い息を吐く。

そして、勢い込んで車内に入ったせいで折れ込んでしまったジャ
ケットを直すように、居住まいを正した。

一足先に飲んでいた佐藤は、ちらりとそんな彼の上着に目を遣る。

「その黒いジャケットも似合うわね」

「え、そうですか？ あんま黒着ないんで、どうかなって思ってたんですけど」

照れたように頭をかく彼を、佐藤は笑って頷き返す。

缶をヒーター前に取り付けた受け皿に置いて、監視先からは目をそらさず話を続けた。

「いつも茶色とか緑とかが多いものね。でも黒も結構映えていいわよ。もらいものだったけ」

「ええ。アパレル関係の人でしたから」

一か月ほど前、殺人事件の目撃者で今後狙われる可能性がある女性を、高木は千葉と共に警護していた。

予想通り犯人は現れて、二人で確保したのだが、その際犯人の振り回したナイフが高木のコートを切ってしまった。

犯人逮捕後、それがずつと気になっていたらしい女性は、自分の勤める会社製のジャケットを彼にあげたのである。

ちなみに、ジャケットは切ったコートの何倍かのお値段のものである。

高木は最初断ったが、性格上断り切れず受け取った。

「高そうだったから大切に使おうと思いましたけど、かと言って仕舞っておいたら使う機会も無さそうだったんで、それならいっそ使いつぶそうかなあと」

「そっちのほうがいいわよ。宝の持ち腐れより、ジャケットも喜ぶだろうし」

足元から冷えてきて、佐藤はフェミニンな白いコートの中のボタンを留めていく。

今回の監視ルックのテーマは「白い恋人たち」である。

どの辺が白い恋人たちなのかはさっぱり本人たちはわからないのだが、彼女にコートを貸した由美いわく「雰囲気よ！ 雰囲気！！」とのことである。

「……でもそれじゃあ破局してるじゃないの」

「え？ なんかいいましたか」

「ううん、ただの独り言」

同タイトルの曲を年末最後の休みの日に聞いていたので、歌詞を思い出して呟いた。

縁起でもない、と苦笑して再び缶に手をつける。

そのまま手の先の外をちらつく「白」が視界に入った。

「あら」

「降ってきましたね」

積もる勢いではないものの、確かに白い結晶が空からふわふわと舞い降りてきた。

同時に夜も近づいている。

「この人通りの少なくなってくる時をねらって、とかありえませんかね」

「あるわね。天気予報でも今夜から降るって言ってたし、それまで犯人も待ってるかも」

「じゃあもう少し我慢して待ちますか、と彼は顔をぱんぱんと叩いた。」

先ほどまで買い出しに行ってたせいで、その指先はまだ赤くなっている。

佐藤はミラー越しにそれを見ていたが、頬から離れたその掌に、ふと自分の手を当ててみた。

「佐藤さん？」

突然の温かさに、高木が目を丸くして彼女のほうを向く。

「つめたそうだったから、ね」

佐藤はそう笑いかけて、レバーの辺りに二つの手を下ろした。高木は思わずそんな手を見つめる。

「ほら、ちゃんとアパート見て！これから出てくるかもしれないでしょ！」

「あ、はい！」

温かな手とは反対に、仕事上のぴしつとした声を出す。

慌てて彼が前を向く。

勿論、手は離さない。

逆に彼女の手を握り返してくる。

「あつたかいです」

「そうね」

ちょうどその時、アパートのある一室の扉が開くのが見えた。犯人だ。

「やっと顔出した」

二人の予想通り、暗闇と雪にまぎれてどこかに行く算談だったよ
うだ。

男は不自然にならない程度に、辺りを見回してから鉄筋の階段を
降りて行く。

それを望遠鏡で確かめながら、高木はふう、と一息ついて呟いた。

「……あともうちょっと、遅く出てきてほしかったかも」

とつさにバカ、と佐藤が言い返そうとするも、高木はもう一度強
く彼女の手を握り締めてから素早く外に出てしまった。

佐藤もすぐさま無線機に進展を告げて、静かにドアをあけた。

粉雪は二人の下にも舞い降りるが、彼女は車内にいた時よりもあ
まり寒さは感じられなかった。

七、あなたとわたしのプロローグ

「高木渉です。よろしく申し上げます」

そう言って、今日付けで捜査一課の刑事になった彼はお辞儀した。力んだ声が初々しい。

緊張しているのか、若干目も辺りをさまよっている。

その最年少の刑事らしい戸惑いに、私も自然と右の口角が上がる。彼の隣で目暮警部が紹介をする。

ふうん、鳥取県警からの異動なんだ。あら、もう巡査部長なの。年は20代前半かしら？

ノンキヤリなのに、その若さで警視庁の刑事部に配属だなんて、早いわねえ。

推しに弱そうな雰囲気だけど、何かすごく秀でた才能があるとか？ それとも、単純にコネとか？

私の周りの人たちも、新入り君の若さに色々邪推しているみたい。ちよつとみんな、犯人をにらむような、こわーい目つきになってるわよ。

あまりの黒いオーラに、新入り君が焦ってるじゃない。

目暮警部だけが、気付いてないのかはたまたスルーしてるのか、朗らかに説明を続けている。

今20代でこの捜査一課にいるのは、白鳥君と私だけ。

白鳥君はキャリアだから、当然と言えば当然。

私は、多分死んだ父親の縁もあったと思う。

- 美和子ちゃんが本当に優秀な刑事でよかった。おかげで迷うことなくココに呼べたよ -

生前父親と親しかった、現在上級職についている人からそう言われたことがある。

20代でも優秀な人はたくさんいる。

ただ、その才能を見つけ出されるまでの期間がそれぞれ違うだけ。私は自分を優秀だとは思っていない。

むしろ、子供のまま体だけ大人になってしまった未熟者だと今でも思ってる。

その成長を止めているのは、自分自身だけけれども。過去ばかり振り返って、先を見れない自分が嫌になる。

いけない、いけない。

また泥沼にはまってしまっわ。

私はため息をひとつついて、現実を確かめるように、前を見た。こんな今と昔の行ったり来たりをいつまで続けると言うの。

いつの間にか自己紹介は終わったようで、皆が新入りを歓迎する拍手をしている。

その拍手に新入りの刑事はもう一度頭を下げた。そして背筋を戻そうとした時。

うっかり拍手をしていなかった私と彼の目が合った。

彼が、きよとんとする。しまった。

不快な思いをさせてしまっただろうか。私だけ手を合わせていないんだもの。

知り合いが元々何人もいた私でも、ここに来た初日はすごく緊張した。

なら、目の前の彼はもつと心細いはず。

なのに、一番年の近い女刑事が唯一歓迎の拍手をしていないなんて。

慌てて拍手しようとするも、既に遅し。

手を打ち鳴らす音は急速に小さくなってしまった。

彼も私と目が合ったのは一瞬だけで、何事も無かったかのように表情を戻していた。

……あー、どうしよう。きつと、怖そうな先輩に見られたわよね。あとからわざわざ釈明に行くのも、何だかわざとらしいし、かと言ってこのままじゃ彼に悪い。

私は頭から血の気が下がるのを感じながら、傍のデスクに手をついた。

すると、

「じゃあ佐藤君。君が彼の教育係になってくれ」
「へ？」

い、今何か一番最悪な展開を言われなかった？

手をついたまま顔だけさっきの方向に戻すと、幸い彼はこちらを見ていなかった。

その代わり、警部のほうを戸惑ったように見つめていた。

ああ、やっぱり私のことに気付いてたんだわ。

だからそんな私が教育係なんて、どうしようとか思っているんだわきつと。

「何間の抜けた顔をしとるんだね。高木君も年の近い先輩と行動を共にしたほうが、気持ちもほぐれるだろう」

「それなら警部、私でもよろしいのでは？」

横から、白鳥君がさつと名乗り出てくれた。

ナイス白鳥君！

何故か他のみんなも「そうですそうです」「ヤローの世話はヤロ―が見ますよ」と同調してくる。

でも、そんな私も含んだ皆の希望は、警部のさらっとした口調で流された。

「今君は目黒区の事件を追ってるだろう。あれはてこずる事件だ。

佐藤君が担当している多摩川の通り魔は、目撃情報も多いから解決も早いだろう。高木君が最初に入る事件なら、佐藤君のほうがいいんだよ」

よりもよって、なんて説得力のある人選理由。

ていうか、ここでごねたら、もっと彼がショック受けるじゃない。ええい、もうどうにでもなれ！

私は心の嘆きを悟られまいと、にっこりと笑った。

「わかりました。では、責任を持って私、佐藤美和子が高木刑事を指導していきます」

「うむ、頼んだぞ。君なら安心だ」

やはり何も気付いてなさそうな目暮警部は満足そうにならず。

次に警部は私の簡単な紹介をしているようで、高木刑事は背中をかがめて真剣にそれに耳を傾ける。

彼は背が高いのだと、私はそこで気付いた。

がっしりとはしていないけれど、ひよろつと上向きに高い。

顔は……悪くは無いわよね。由美の好みからは外れそうだけど。

説明を聞き終えた高木刑事は、こちらに向かってくる。

皆がいる手前、ここでさっきのことを掘り返すのは白けそうだし、やめておこう。

後からちゃんと、謝ろう。

私は咳払いをして、背筋をぴんと伸ばした。

彼が目の前に来たところを見計らって、自分からあいさつしよう
と息を吸い込んだ。

「はじ」

「あ、あの、大丈夫ですか」

え？

思わぬ問いかけに、初めましてと言いかけた口が開いたままになる。

「あ、す、すみません！　ここ入ったときから、皆さんの顔を覚えようがんばって見てたんです。で、佐藤刑事は何か、さつきから元気がないように見えたので……どこか具合でも悪いのになって」

段々声が小さくなって行って、最後らへんは近くにいた私くらいにしか聞こえなかったはず。

さつきと言っても、私を見たのはあの一瞬だけのはず。

しかもあの時の私の顔は、自分でもアホ面だったと思う。

それなのに、この子は私が元気がないと思ったのかしら。

返事を忘れてぼかんとする私をどう思ったのか、高木刑事は慌てて頭を下げた。

これでお辞儀は3回目。

「す、すみません！　いきなり僕変なこと言いましたっ忘れてくださいっ」

すみません、もこれで2回目。

このまま黙ってたら延々とお辞儀とすみませんを繰り返しそうだったので、私は嘔き出しながら彼の肩をたたいた。

「いいのいいのよ！　私は大丈夫よ。ただちょっと考えごととしてただけ。拍手していなくてごめんなさいね」

安堵した様子で、彼が徐々に頭を上げていく。

私の顔を窺うような仕草だったので、さつきの強がった笑顔は違い、心からの笑みを彼にかけた。

「氣遣つてくれてありがとう。これからよろしく」

そして、私は手を差し出した。

高木刑事はその手をちよっとの間見つめた後、握手で返してくれた。

何故か周囲は殺気立ったけど、私の心はいつの間にか穏やかなものに変わっていた。

彼も嬉しそうだった。

その顔が、何だか可愛く見える。

母性本能みたいなものがくすぐられる子かもしれない。

「おい、そろそろ手を離せ新入り」

「そうだぞ、入ってすぐ美和ちゃんの手を握るなんて……」

「あらなーに？ そんなに高木君と手を握りたいなら、私がつと握っちゃおっかな」

「ええっ!?!」

更に悲鳴のような声を出す皆と、あわてふためく高木刑事がおもしろくて、私は握った手を左右に揺らしてみた。

これから、楽しくなりそうね。

八、海の底の少年の話（前書き）

この話で最後です。高木が出てくる話、という以外全て内容がバラバラな短編集でしたが、お付き合いくださりありがとうございます。た。

八、海の底の少年の話

凶器探して郊外に出たら、うっかり森に入ってしまった。
高木は一人で頭をかく。

探していたのは、刃渡り20センチくらいの包丁。
殺人の疑いで逮捕された男は、未だ黙秘を続けている。
状況証拠で捕まえたので、凶器はまだ出てきていない。

捜査員は犯人の家や立ち寄りそうなところを虱潰しに探したが、
どうやっても見つからなかった。

対策本部にはいら立ちが募り始める。

そんな剣呑な雰囲気の中、デスクで犯人の経歴を見ていたときに、
ある項目に目がとまったのだ。

『 高等学校入学 登山部入部』

犯人は大学入学で東京に来るまで、違うところに住んでいた。

そこで登山を高校三年間やっていたらしい。

しかも資料によると、3年生のときには副部長にまでなっている。

それなりに真面目に取り組んでいたのだろう。

そこまで資料を読んでいて、ふと思いついた。

犯人が住んでいたマンションから見えた、低い山が。

近所では無い。

ビルとビルの合間から、山のとっぺんだけが覗ける程度の距離だ
った。

思い出すと、居てもたつてもいられず車でそこまで来てしまった。
平日の昼間なので、辺りに人気は無い。

山を目の前にして突っ立ってるだけでも意味ないので、とりあえ
ず適当な道から中に入る。

マンションで見た山は茶色っぽくて、あまり木のあるイメージで

は無かったが、実際歩いてみると意外と緑があった。

東京にもこんな森があるんだな、とのんきに考えながら、高木はどンドン奥に突き進む。

登る、というより細い車道沿いに歩く感じた。

暫くして、車道の脇に整備されていない小道が見えた。

「この先立ち入り禁止」の看板があったが、少しだけ考えた後、それを無視して道の無い道に足を踏み出した。

太陽の光が注ぐ車道から、一気に影の中に入る。

森に朝も夜もない。

生い茂った葉が空を遮り、薄暗い世界が永遠にある。

自分が生まれ育った場所にも、こんな森があった。

高木はおぼろげな記憶を引き出す。

夏休み、蝉取りで一人その森に入ってしまったことがある。

でも、その時はすぐに引き返してしまった。

暗い暗い海の底の様な世界。

森なのに、そこは仄暗い海底の様な不気味さだった。

進めば進むほど、何故か蝉の鳴き声は小さくなっていった、一人でぼつんと森の中に突っ立った。

蝉はどこにいったんだろう。

不安になりながら辺りを見回すと、蝉ではなく甲高い野鳥の鳴き声が突然聞こえた。

背筋が、ぶるりと震えた。

あの時の恐怖を今でも覚えている。

そして、子供だった自分は来た道を急いで戻った。

全力で走って、草葉で体のあちこちが引っかかれようとも、必死に必死に、海の底から這い出ようとした。

でも今は。

高木は湿った土で少し汚れた革靴を見下ろしてから、次に上を見

た。

あの時と同じような仄暗さ。

同じように甲高く鳴き続ける鳥の群れ。

今聞くと、絶命する人の最後の声によく似ているような気がした。

背筋は震えない。

海の底でもない。

ここは、ただの森。

立ち入り禁止の、人の手の加えられてない草葉の世界。

視線を遠くまでやると、何か鈍く光るものが見えた。

はっとして、高木は大腿でそこまで進んだ。

革靴が更に汚れていく。

光る元にたどり着いて、薄くかかっている土を勢いよく手で払った。

そこから出てきたのは、やはり想像通りの刃物。

ご丁寧に血までこびりついている。

犯人の男は、高校時代を思い出しながらここに来たのだろうか。

その血に反応するかのように風が吹いて、木たちがさわさわと囁き合った。

一層人に近い、鳥たちの鳴き声も連なった。

それでも落ち着いて、白い手袋をしてから包丁を手を取った。

そしてゆっくりと、太陽を遮る樹木に向かってかざしてみる。

刃に映るのは、あの時の子供ではなく、勿論今の自分。

いつの間にか、ずいぶん遠いところに来てしまったものだ。

何かを取り戻そうとするように、高木は深呼吸をして草のにおいをかいだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2855j/>

海の底で

2010年10月11日13時28分発行